二〇二〇年度　入学試験問題

経済学部A方式I日程・社会学部A方式I日程・現代福祉学部A方式

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

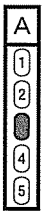
四　問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

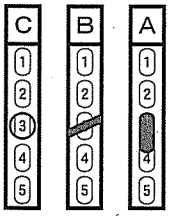
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例



(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

『ラエリウス』という作品の中で、キケロは、友情があらゆる行動を正当化する理由となりうるかどうかという問題、すなわち、友情が命じる行動と公共のルールが相容れない場合、どちらが優先されるべきなのかという問題を提起する。これは、キケロ以降現代にいたるまで、友情を主題的に取り上げるかぎり避けて通ることのできない問題となった。友情と公共性の関係は、友情論の根本的問題として受け取られねばならない。友情論の系譜を遡るとキケロに辿り着くのは、この問題に答える最初の試みが、キケロの『ラエリウス』に見出されるからなのである。

友情の命じる行動は、反社会的な性格を帯びる危険がある。これは、決して偶然ではない。友情には、もともとそのような性格が具わっているのであり、誰かの友人であることは、罪を犯す危険に晒されていることに他ならないのである。仲間や同志としての連帯感や一体感は、友情の本質的な要素ではなく、友人との付き合いの副産物にすぎないのであり、しかも、連帯感や一体感のせいで、友人との付き合いが正常な軌道から逸脱してしまうことがあるのである。

A 、キケロは友情論の系譜の出発点に位置を占めているにすぎず、友人とは何か、友情とは何かという問題に答える試みは、キケロとともに終ったわけではない。たしかに、キケロは、友情と公共性の関係について、自らの見解を持っていた。けれども、「友人のためなら何をしても許されるのか」という問に対し、キケロが単純に否と答えるとき、もちろん、この答は万人を満足させたわけではないのである。キケロに続く者たちは、キケロの立場を、友情と公共性の関係について提起された問題の最終的な解決とは認めなかった。友情論の系譜の中には、友情と公共性の関係をキケロとは異なる視点から理解する試みが見出される。友人というのは、ただ一つの視点から説明することの困難な存在である。

キケロは、その生涯のほとんどを政治家として過した。しかも、政治家としてのキケロは、当時のローマの政界の中で、無視することのできない影響力を持っていたのであり、政界の周縁で、傍観者として目立たないようにたたずんでいた無数の政治家の一人ではなかったのである。文化史上の人物としてのキケロの名声や、自ら試みた大がかりな宣伝の効果を割り引いて

もなお、紀元前一世紀半ばの政界の内部でキケロが占めていた地位やキケロに帰せられている実績を冷静に眺めるなら、彼がよい意味でも悪い意味でも人目を惹く存在であったことがわかる。

政治家としてのキケロの活動の場は、共和政末期のローマであった。この時期、ローマは内乱状態にあり、従来の統治のシステムは、ほとんどまったく機能しなくなっていた。キケロが政界に登場したとき、その目に飛び込んできたのは、機能不全に陥った政治的社会的制度であり、大規模な私的武装集団を率る有力者たちが武力を背景にして繰り返す権力闘争であった。政治的な影響力を維持するには、十分な武力を動員できることが必要になっていたのである。そして、これらの有力者たちはみな、独裁者になることを最終的な目標にしていた。少くともキケロの目には、事態はこのように映っていた。

ローマでは、戦争での勝利を祝う凱(ア)セン式のときを除き、武装したまま市内に立ち入ることは法律で禁じられていた。

B 、紀元前一三三年にティベリウス・グラックスが市街戦の末に撲殺されたとき、当時の政治家たちは大きな衝撃を受けたのである。しかし、それから約五十年を経て、キケロが政界に入るころには、その直前まで独裁を行っていたマリウスやスッラによる権力闘争の結果、この法律は見事に空文化していた。ローマの街は武装した私兵によって繰り返し占拠され、市街戦も珍しいものではなくなっていたのである。

たしかに、紀元前一世紀前半までには、ローマの領土は、エジプトを除く地中海沿岸のほぼ全域に拡大し、地中海は事実上「われらの海」になっていた。ローマは、あまりにも広大になり、その領土を維持する戦力を、伝統的な手続きでローマ市民から集めることは、もはや不可能になっていた。また、新しい領土には、ローマの伝統的な統治のシステムに取り込むことのできないような多くの異民族の住む土地が含まれていた。イタリア半島の一部だけを領有する小規模な都市国家を想定した政治的社会的制度では、現実に対応することができなくなり、ローマは、新しい政治の形態を必要としていたのである。

けれども、武力を背景にした権力闘争と独裁の中で、公共のルールが軽視されるとともに、そして、社会のすべての構成員の利害にかかわる事柄が特定の集団にとってのみ都合のよいように決められるたびに、社会の C . は損われ、公共のル

ールに対する感覚は麻痺して行った。キケロが、スッラやカエサルやポンペイウスやアントニウスなど、人生行路に姿を現した有力な政治家たちに批判的な態度をとり続けたのは、彼らが、武力を背景にして影響力を行使することをためらわなかったからであり、その行動が［　あ　］であったからに他ならない。(1)キケロの前に広がっていたこのような状況こそ、キケロの注意を友人や友情の意味に向けるきっかけであったと考えることができる。

キケロによれば、友情の命じる行動と公共のルールが相容れないときには、公共のルールの方が優先されなければならない。キケロ以降に友情の問題を取り上げた哲学者の中には、キケロのこの主張に同意しない者がいなかったわけではない。また、キケロ以前、あるいはキケロの同時代にも、キケロとは見解を異にする者がいたかも知れない。しかし、少くとも確かなことは、「友人のためなら何をしても許されるのか」という問に否と答えたとき、キケロが、この問題をめぐる古代世界における多数意見を前提としていたということである。「友人のためなら何をしても許されるのか」という問に対してキケロが示した［　い　］は、キケロが、友人とは何か、友情とは何かという問題をめぐる古代の哲学者たちの共通了解に依キョ(イ)していたことを物語っている。

古代ギリシア、ローマの現存する文献の中で、友人や友情の意味についてもっともまとまった記述を含んでいるのは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』である。アリストテレスの講義録をもとに、アリストテレスの死後弟子たちによって編集されたと推定されているこの著作は、キケロの時代にはほとんど知られていなかったものであり、キケロ自身も、この著作を参照してはいない。しかし、『ラエリウス』において主人公のラエリウス(＝キケロ)が語っていることは、友人や友情の意味をめぐるアリストテレスの見解と本質的な点において一致している。

ただし、古代ギリシア語には、現代の日本語の「友情」に正確に対応する言葉が欠けており、友情は、「好むこと」一般を指す(2)「フィリア」という言葉が指し示すものの一つとして、類似の概念から、少くとも言葉の点では明瞭に区別されることなく、単に「フィリア」と呼ばれている。たしかに、この「フィリア」という名詞によって指し示される範囲は、「友情」よりもはるかに広い。たとえば、「フィリアについて」という副題を持つプラトンの対話篇(へん)『リュシス』において、対話篇の主人公ソクラテスがフ

ィリアを定義するために言及しているのは、「馬」のような人間以外の生物や、「酒」のような無生物を対象とするフィリアである。これらの「フィリア」を「友情」に置き換えることは不可能であろう。

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の場合には、テーマは実践哲学におけるフィリアに限定されている。したがって、人間ではないものを対象にするフィリアが考察に含まれることはない。しかし、それでもなお、そこには、「友人」や「友情」の意味をめぐる記述としては理解することのできない箇所が含まれている。ただし、この事実は、友情というものが本来位置を占めていた文脈を知るための手がかりとなる。

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』において、フィリアが「共通の」(コイノス)ものにかかわることを主張する。アリストテレスによれば、フィリアは、共通の事柄に関与している者たち、何かを共有している者たちのあいだに成立するものである。そして、この共通の(コイノス)ものを介して成立するものが「共同体」(コイノーニア)と呼ばれることになるとアリストテレスは言う。

アリストテレスのこの説明に従うなら、友情というものは、[I]フィリアの一部をなすものとしての友情とは、友人への配慮ではなく、友人と共有しているもの、共通の(コイノス)ものへの配慮であり、この配慮が、同じものを共有し、共同体(コイノーニア)をともに構成している相手へと及ぶことにより、友人がフィリアの対象、つまり「友人」(フィロス)と認められることになるのである。

したがって、フィリアは、あらゆる種類の共同体の前提となるものであり、共同体のルールとしての「正義」もまた、フィリアに基礎を持つものとして理解されねばならない。

さらに、アリストテレスは、すべての共同体が都市国家(ポリス)という名の共同体の一部をなすものであるとも語っている。アリストテレスのこの主張に従うかぎり、すべてのフィリアは、そして、フィリアの一部をなすものとしての友情もまた、本質的には都市国家(ポリス)を対象とするものであることになり、[D]へと収(ウ)ソクすべきものとなるに違いない。

政治的な混乱に立ち会った経験は、キケロにとり、友人や友情の意味を明らかにする作業と一体のものであった。アリスト

テレスを始めとする古代の多くの哲学者と同様、キケロは、友情を公的なものとして理解していた。友情が公的でなければならないのは、友情が共同体の構成員を統合するものであり、したがって、共同体の基盤をなすものであるとともに、［う］原理でもあったからである。アリストテレスが、『ニコマコス倫理学』において、共同体を統治するときには正義よりも友情に注意を払うべきであることを主張するとき、「友情」という言葉によって指し示されているのは、公的な友情なのであり、政治的混乱が告げているのは、公的なものとしての友情の危機なのである。

（清水真木『友情を疑う―親しさという牢獄』より。ただし原文の一部を変更した。）

問一　本文中の空欄［A］～［D］に前後の文脈から入る最も適切な言葉を、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A　a　そのうえ　b　ただし　c　したがって　d　もともと　e　同時に

B　a　それゆえにこそ　b　さもなければ　c　案の定　d　さることながら　e　なぜならば

C　a　妥当性　b　不変性　c　合理性　d　一体感　e　幸福感

D　a　同胞愛　b　正義感　c　義侠心　d　信仰心　e　愛国心

問二　本文中の空欄［あ］～［う］に入る言葉として、最も適切な語句を、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

あ　a　伝統的な制度を打ち壊すもの　b　公共の利益を損なうもの
　　c　新しい政治の形態を生み出すもの　d　既存のルールを見直させるもの
　　e　友情への興味を失わせるもの

い　a　好意的な解釈　b　断固たる肯定
　　c　暗黙的な了解　d　矛盾した主張
　　e　否定的な反応

う　a　公共のルールを支える　b　都市国家を形作る
　　c　正義を生み出す　d　自由と平等を確保する
　　e　政治的な影響力を維持する

問三　傍線部(1)の「キケロの前に広がっていたこのような状況」とあるが、それはどのような状況か。適切なものをつぎのa～eの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　公共のルールを遵守する者が政治的な影響力を持ち、ローマの街を支配している状況。
b　主張を異にする政治家が群雄割拠し、公共のルールを守らない友人が増えた状況。
c　独裁者になろうとする有力者が権力闘争を繰り広げ、公共のルールが形骸化している状況。
d　ローマの領土が広がった結果、異民族が入り込むことでローマ市民から伝統的なルールが失われた状況。
e　一部の有力者が社会のルールを決定し、その他大勢の公民の利益を損なっている状況。

問四　傍線部(2)の「フィリア」について、本文の内容に合致するものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　「フィリア」は本来、「好むこと」一般を指す言葉だったが、アリストテレスによって「友情」という意味に定義された。

b　「フィリア」は人間以外の生物や無生物も対象とするが、何かを共有するということは人間同士にしか当てはまらない。

c　「フィリア」を人間に限定して考えたとしても、今日でいうところの「友人」や「友情」の理解に役立てることはできない。

d　「フィリア」の意味は「友情」より広いが、「フィリア」について考えることは、友情の本来の意味を知る手がかりになる。

e　「フィリア」の意味の変遷を知ることで、「友情」に対するアリストテレスとキケロの考え方の違いが具体的に理解される。

問五　本文中の空欄 I に入る最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　互いに共有しているものを意図的に見出すことによって現れるものということになる。結局、

b　友人たちが直接に相手を気づかうことのうちに現れるものではないことになる。むしろ、

c　必ず共感してくれる人物を必要とし、人間でないものは含まないことになる。同時に、

d　他者からの配慮を必要とせず、自らの意志によって成り立つということになる。したがって、

e　他者への思いやりを必要とし、他者と感情を共有したときに成り立つものである。一方で、

問六　傍線部(ア)～(ウ)のカタカナ部分にふさわしい漢字を含む文を、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア)　凱セン式

a　委員をセン定する。
b　勝利をセン言する。
c　首都をセン領される。
d　試合を観センする。
e　ピアノのセン律が聞こえる。

(イ)　依キョ

a　キョ実を確かめる。
b　山に隠キョする。
c　史実に準キョする。
d　暴キョに出る。
e　免キョを取得する。

(ウ)　収ソク

a　返事を催ソクする。
b　ソク座に決める。
c　憶ソクで判断する。
d　将軍のソク室を決める。
e　チームの結ソクは固い。

問七　本文の内容に合致するものを次のａ～ｅの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　キケロは、友情の命じる行動と公共のルールが相容れないときには、公共のルールの方が優先されなければならないと考えている。それは都市国家において、法律に基づかない個人的な感情は統治の妨げになるからである。

ｂ　友情の命じる行動は、反社会的な性格を帯びることもあるが、それは仲間や同士としての連帯感や一体感によってもたらされた副産物である。キケロが考える友情の本来の姿とは、共同体の公的な認識を共有する者たちの間になりたつものである。

ｃ　国家が不安定な時には、武力による統治の方が有効であるため、公共のルールは軽視されることが多い。これを防ぐためには、自身が友人と共通の認識を持っているか随時確かめ、共同体を支える愛国心を培わなければならない。

ｄ　友情論の系譜を遡るとキケロに辿り着くが、後世の哲学者たちは、キケロの「友情」に対する考え方を完全に認めたわけではない。むしろ多くの哲学者は、社会のルールを守る限りにおいて、「友人のためなら何をしても許される」と考えている。

ｅ　アリストテレスの『ニコマコス倫理学』には、友人や友情についてのまとまった記述が含まれている。しかし、キケロはこの本を見てはおらず、そのためキケロの「友情」に対する捉え方は、『ニコマコス倫理学』の中のアリストテレスの「フィリア」についての定義とは根本的に異なる。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

お能は大変解りにくいもののように思われています。色々約束があって、それを全部知らないかぎり、とても解らないときめている人もあります。何しろ今から五百年も前に完成された芸術がそのまま伝わって今に至ったのですから、文学や美術などの、いわゆる有形文化財と違って、古い形を保つ為には、どうしても厳しい規則を必要としました。相手は同時代の生きた見物です。その好みにそって、残る為には変らなくてはならず、変りすぎたのでは残らない、そういう不安定な立場にあればこそ、多くの約束をもって自ら縛る必要性も生じたのです。 a

しかしそれは専門家側の言い分で、見物にとって必ずしも必要なことではありません。もともと物真似から発達した芸術のことですから、よく見れば、我々の日常の動作からそう離れたものではないのです。無意識に行う動作には、よけいなものがあり、不純なものもあり、醜いものもある。それらを全部取りのぞき、美しいものだけを残し、単純化してみせたものがお能の「型」です。その他謡(うたい)にも囃子(はやし)にも、それから舞台の上にも、数限りない約束があり、それを一々点検していたら、肝心のお能を見るひまはなくなります。ですから、約束を知らなければ解らない、というのは意味のない言葉です。また、自分で習ったから解る、といったようなものでもありません。自分でやってみるのは確かに一つの方法ですが、「物が見えて来る」というのは、またそれとは別問題です。文学でも美術でも、総じて古典は取りつきにくいものですから、先ず何よりも馴れることが第一です。しかし、それは何も古典にかぎったことではないでしょう。 b

能楽堂に入ると、むき出しの舞台が目につきます。劇場と違うところは、幕がないこと、見物席の真中まではみ出ていること、左に長い「橋掛(はしがかり)」(欄干のついた廊下)があること、屋根があること、殆ど装飾のないこと、等々をあげることが出来ます。

屋根があるのは、昔お能が戸外で行われていたことを物語ります。舞台の後ろに松が描かれ、橋掛には小松が植えてありますが、これも同じく当時の名残です。今でも奈良には古い型式が残っていますが、昔(鎌倉時代あたりまで)舞台もなく、外に築いた土壇の上で、自然の風景を背景に舞われました。そして、忘れてならないことは、はじめは神仏への奉納の形式をとっ

たことです。すなわち、見物に見せる為ではなく、神の心を慰める為に、人間が捧げた、「神楽」に近い意味を持つ舞踊の一種であったのです。

お能が完成されたのは室町時代ですが、舞台もそれとともに発達しました。人間の動作から、よけいなものが省かれたように、あるがままの自然の中から、舞台も、その最も必要とするものの他とりませんでした。加えることによってではなく捨てることによって発達したのがお能の歴史です。自然の中から代表的なものとして、松が選ばれました。神木を背景に神へ向って捧げられた舞は、舞台の後ろに描かれた老松となり、それまで無視されていた観衆は神にかわって、正面から見物するようになりました。昔、立樹の間を通って、土壇にあがった役者達は、橋掛の小松を縫って登場します。色々な意味で、

A なものに成長していきました。 c

お能が象徴的な芸術といわれるのは、そういうことをいうのです。見物はそこに、松によって象徴された、あらゆる木を見、すべての「自然」を見るのです。たとえば「羽衣」は、天人が三保の松原に降りて、水浴みをするうち羽衣を漁師にぬすまれる。舞を舞うのとひきかえに羽衣を返して貰い、めでたく天に還るという、誰でも知っている筋ですが、お能では背景というものを用いません。ここは三保の松原であり、富士がそびえ、足元には浪が打ちよせています。それらはすべて「解りきったこと」であり、それ以上の説明は不要です。同じ舞台が、時には深山となり、楼閣とも化します。また天上にも海底にもなります。

I 。

あくまで見物を説得しようとかかる演劇との根本的な違いが、そういう所に見られますが、技術を持たなかったから背景がないのではなく、必要でないから捨てたのです。それだけのものを、見物の想像力にゆだねた、あるいは、一切の説明をぬきにして、見物の判断に任せた、といってもいいでしょうが、それははじめにも書いたとおり、お能が本来演劇的な性質を持ち合わせなかったからです。 d

見物はいたが、人間が対象ではなかった。神を対象とするとき、「祈り」の形をとるより他なく、舞人は役者より巫女に近く、舞は芝居より神楽に似て、多分に B な要素をふくまざるを得ません。たしかに、それは一応演劇的な構成をもって出

来上がっていますが、その中心は舞にあり、台詞は、そこに無理なく運んで行く為の、手段として扱われるにすぎません。そういう意味で、この芸術は、純粋な舞踊といってよく、謡は戯曲でも散文でもなく、一番詩に近い特種な「うたいもの」です。

e

話が少しそれましたが、お能がそういう性質をおびているということが、もしかすると解りにくくさせる原因ではないかと思います。ア一人よがりで、見物は無視されているような、しかし決して一人よがりでも、無視するのでもない。見物人が、芝居や映画と同じ態度でのぞむ所に間違いは起こるのです。もしその立場をちょっとかえて、積極的に動いてみるなら(想像力を働かせるなら)芸術家の創造の喜びと同じたのしさを味うことが出来る筈(はず)です。何もない所に、ものをつくり上げるという——しかし何もなくては芸術にはならないから、最も適確な、たった一つのヒントを与える。すべての芸術家にとって難しいのは、そのたった一つの「言葉」を選ぶことにありますが、この抽象を具体化させる、この思想に形を与える、半分の責任は見物の側にあります。その自覚がないかぎり、ぼんやり見ていて向うから面白くなってくれるたちのものではないのです。もしこれをも「約束」とよぶなら、お能の鑑賞上必要なものは、舞台の人と見物を結びつける、この①暗黙の約束以外のものではありません。

なぜ舞台が見物席の中程までつき出ているのか、なぜ幕によってへだてられていないか、——それは彼と我の間が、二つの異なる世界ではないからです。見物は、舞う人と同じ呼吸をし、同じ感情に身を任せなければならない。鑑賞とは(お能に限らず)そういうことであり、遠くから観察することと違うのです。それは一つの行為と呼ぶことが出来ます。

f

はじめに私は、馴れることが必要であると書きましたが、千万の言葉より、先ずお能を見ることが大切です。もしかすると私のいうことは、今は少し解りにくいかもしれませんが、お能をよく見れば解ることです。近頃流行のダイジェスト的物の見かたは、大そう便利ではありますが、それはたとえば富士山の上を飛行機で飛んで、富士山をよく見た、と思うのと同じようなもので、富士という山は、自分の足で歩いて、登ってみなくては、ほんとに知ったことにはなりません。ですから私が書いたことは、またこの先書くことも、読めばひと目で解る、お能のダイジェストと思って頂いては困ります。ひまをかけて、こ

れから見ようとする方達を、それもたぶんほんの入口までしか案内することは出来ないでしょう。それから先は一人でなくては入れません。「狭き門」は、あらゆる芸術に共通のものです。

お能が他の演劇と違うところは、仮面を用いることです。

仮面の歴史は古く、伎楽（ぎがく）・舞楽面などには、非常にすぐれたものが残っています。しかしいかに彫刻として傑作であっても、それらの面は、喜びなら喜び、怒りなら怒りという、［C］な、ある特定の表情しか現していません。

そういうものの中から、次第に発達して能面は、仮面の歴史の上に、一つの革命をもたらしました。それはどんなことかといえば、一つの面の上に、あらゆる表情を具備（イ）させることに成功したのです。能面に至ってはじめて、従来の固定したものから、人間の顔と同じ様に、どの様にも自由に変化し得る、柔軟性を持つものに進歩したというわけです。

これはあきらかに、それまでの、仮面というものの観念と、まったく別物であるという事が出来ます。超人的な力を現す為にのみあった面というものが、ここにおいて、微妙な感情を現す、きわめて複雑な動きのあるものとなったのです。

能面には種類が多く、その中には神とか鬼の様な、強い表情をとらえたものがあり、それらはやや舞楽面の系統をひいているといえますが、その特質はどちらかといえば、超人的なものより［D］なところにあります。その全部にわたることは到底ここでは不可能なので、後者の中でも一そう特長のはっきり現れている女面についてのみのべたいと思います。面（おもて）の中には、一つの能にしか用いられないものもあり、いくつかに通用するのもありますが、一番用途の多いのは若い女の面で、お能にはまた若い女性を主役とした曲が、他の男や老人や鬼や神を主題にしたものより、比べものにならぬ程多いのでもわかります。

皆さんは「幽玄」という言葉をお聞きになったことがおありでしょう。平安朝に和歌の用語として使われた、ある特種な美しさの形容ですが、後足利時代に至って、お能を完成した世阿弥が、その内容を能楽の中に取りいれました。ひと口にいえば、しっとりした、内面的な美しさ、という程の意味ですが、彼はこの幽玄を、能の美の標準として定めたのです。そしてその中でも、特に女の能を「幽玄」の極であるとし、したがってそれらの曲が、お能の中で最もお能らしいものという事が出来ます。

それはどんな風なものかと言うと、「羽衣」もその一つですが、総体に動きの少ない、筋も殆どないといっていい様な幻想的な曲で、極(ご)く一般的な意味で決して面白いものではありません。しかし、人目をそばだてるもの必ずしも美しいとはいえない様に、お能の美は――その本来の姿は、静かなそして目立たぬ所にあるのです。それが長く残ったというのも、その美しさが、見物の一時的な歓(ウ)心を買う性質のものではなかったからでありましょう。私がここで解りやすい特長を取り上げないのも、お能の本質というものが、仮に少々難しくとも、よく解って頂きたいと思うからです。

（白洲正子『お能の見方』より。ただし原文の一部を変更した。）

問一　傍線部ア～ウの語句の意味として最も適切なものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ア　一人よがり

a　自分一人の考えで物事を決定すること
b　自分だけで良いと思って他人の言うことを顧みないこと
c　ただ一人の役者が舞台で演ずること
d　自分だけわかったつもりになり得意になること
e　他人を気にせずに自分の思うように振る舞うこと

イ　具備

a　必要なものが完全に備わっていること
b　必要なものをいつも備えておくこと
c　必要なものを身につけて見せること
d　必要なものが十分に備わっていること
e　必要なものを機能させること

ウ　歓心を買う

a　他人の良い点を見つけ共感をする
b　物事の価値を認め評価をする
c　他人に気に入られるように努める
d　新しい趣味を見つけ楽しむ
e　他人に関心をもたれるように行動する

問二　本文中の空欄 A ～ D に入る最も適切な語句を、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A　a 機能的　b 限定的　c 革新的　d 人工的　e 霊的

B　a 刹那的　b 自己陶酔的　c 排他的　d 必然的　e 閉鎖的

C　a 画一的　b 夢幻的　c 瞬間的　d 永続的　e 暗示的

D　a 観念的　b 女性的　c 因習的　d 人間的　e 巨視的

問三　つぎの問いに答えよ。

A　平安時代に活躍した歌人は誰か。あてはまらない歌人をつぎのa～eの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 柿本人麻呂　b 清少納言　c 紀貫之　d 藤原定家　e 紫式部

B　世阿弥の作品はどれか。あてはまる作品をつぎの作品名のa～eの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 風姿花伝　b 山家集　c 花鏡　d 梁塵秘抄　e 大鏡

問四　本文からはつぎの一文が抜けている。それは本文中の a ～ f のいずれに入れるべきか。最も適切な箇所を一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

美はつねに、衣装の奥深くかくされているのです。

問五　本文中の空欄 Ⅰ に入る最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　馴れ親しむことで、見物はお能を理解するのです。
b　見せるのではなく、見物の眼が見るのです。
c　神に祈ることで、見物は物が見えて来るのです。
d　舞台の知識を得ることで、見物は鑑賞できるのです。
e　役者の神聖な舞が、見物の心の眼を開くのです。

問六　傍線部①の「暗黙の約束」について筆者の意図としてふさわしいものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　お能は演劇ではなく祈りであるため、見物は無視されていると理解すること。
b　見物は能動的に舞を舞うことによってのみ、その芸術性を理解すること。
c　見物は象徴化された舞台に自らの想像力を働かせて見物する必要があること。
d　見物は舞人と一つの世界を共有しているため、ただそこに無の境地で存在すること。
e　見物は芝居や映画を見るときとは異なり、お能の幽玄をまず理解すること。

問七　本文の内容に合致するものをつぎのａ～ｆの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　お能は有形文化財と異なり変化しないように「型」を守り通す必要があった。

ｂ　お能の約束をすべて知ることによって、見物はお能の幽玄を理解することができる。

ｃ　お能の約束を知らなくても繰り返し見るだけでその美的理念を理解することができる。

ｄ　日常の動作を単純化してお能の「型」が出来たように、舞台も同様に単純化した。

ｅ　お能は演劇的な性質を持ち合わせておらず、その中心は台詞の内容にある。

ｆ　能面は人間の複雑な表情の動きや変化を現すことができるように進歩した。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近「人命尊重」がしきりに叫ばれているが、ここでいうところの人間の「生命」とはいったいなにを意味しているのか……？それはふつう〝眼の黒い〟法医学でいう生活反応を呈する状態、要するに人間の「生活」をその根底で支えているなにか原動力のようなものを言っているのであろう。［　ア　］、そこでは生命と生活は表裏一体の関係となり、生命がなくなれば生活は終りを告げ、逆に生活が終ればそれは生命が喪失したことを意味することになる。ひとびとはこれを「死」と呼び、これに対して生命が生活を支えている状態を「生」と呼んでいる。

〝生とは死に抗する機能の総体をいう〟。これは「生と死の生理学的研究」と題する長編の冒頭に述べられた西欧を代表する若き医学徒の言葉であるが、この「死」に対抗する「生」をかれらは life, leben, vie, ……の言葉で表現している。したがって、たとえば英和辞典で life の項目を引けば、そこには「生命」と「生活」の両義が共存するのであるが、このことは最近①ハイカンになった同名雑誌に人命救助の写真と『暮しの手帖』の記事が並んでいるのを見ても明らかなことであろう。かれらの〝くらし〟には〝いのち〟がかかっていたのであるから……。

だが、はたしてそれだけであろうか？「生」とは生命と生活の一組だけを意味するものであろうか？「死」によってこの両者がともに消失するのであろうか？どうもことはそう簡単に片づくものではないように思われる。

われわれは日常〝あの眼は死んでいる〟〝あの心は腐っている〟という一方において〝お日様がほほえみ〟〝そよ風がささやく〟と表現する。こうした言いまわしは、ひとびとの素朴な生活感情が素直に表われたものとして、はるか彼方の昔からすべての民族によってえんえんと受け継がれてきた共通の表現であるが、これによれば生活を営むいわゆる生物に生命がなかったり、またその逆であったりして、そこでは「生命」の有無と「生活」の有無が必ずしも平行することにはならない。したがって生命の本来の意味は、小学校の理科の時間で教わる定義とは、およそかけ離れたものであったことがうかがわれる。それはいったいなにか？ここでは結論を述べるにとどめよう。

われわれがなにごころなく自然に向かった時、そこでわれわれの五感に入ってくるものは諸形象すなわちもろもろの〝すがたかたち〟であろう。路傍の石ころを目にしても、小川のせせらぎを耳にしても、秋のけはいを肌で感じても、そこにあるものは例外なくこの〝すがたかたち〟であり、それらはことごとく生きた表情でわれわれに語りかけてくる。これに対し、われわれがある思惑をもって自然に対した時、そこでは無生の〝しかけしくみ〟しか問題になってこない。例えば解剖学的に涙を考えた時、分泌の伝導路だけで頭がいっぱいになるように……。

〝すがたかたち〟として観得された「形象」はことごとく生きているのに対し、〝しかけしくみ〟として把握された「物体」はすべて生きていない、と言えばよい。前者では時間や空間にも生命が宿るのに対し、後者では人間すら単に力学的に運動する諸原子の一結合に過ぎないものとなる。

自然を眺める人間の眼には二種が区別される。そのひとつは〝かたち〟に向かうものであり、他のひとつは〝しくみ〟に向かうものである。われわれはこのいわば左右の眼の使い分けによって、ひとつのものが、ある時は生きたものとなり、ある時は死んだものとなる。前者を〝こころの眼〟と呼び、後者を〝あたまの眼〟と呼ぶ。

以上で「生命」とは、［　I　］が解明された。したがって、ある人間の持つ〝すがたかたち〟の②キョウレツな印象がひとの心に深く刻み込まれた時、その人間の「生命」は生活を終えた死後もなお、脈々としてひとの心に波うち、消え去ることがない。そこでは〝死んでもいのちがある〟ことになる。

ここからわれわれは「人間生命」と題するその意味が明らかになったのではないかと思う。それは人間の生活を支える原動力のようなものではなく、人間の持つ〝すがたかたち〟そのものでなければならない、ということになった。

〝すがたかたち〟の学問体系の基礎が、ゲーテの形態学によって確立されたことを知るものは少ない。ゲーテはこうした人間独自の〝すがたかたち〟を人間の原形と呼び、この原形の解明にその生涯を賭したのであったが、もっとも厳密な意味での「人間形態学」とは、こうした人間の原形探求の学でなければならないことは言うまでもない。それが人文の学に属そうと、あるいは自然の学に属そうと。

人間の原形――要するに〝人間らしさ〟とはいったいなにか？ゲーテは猿から峻別するいわば伝家の宝刀といわれる「理性」によって人間は〝いかなる猿よりも猿らしくなった〟と言う。そして現今は、この〝人間らしさ〟を失った生ける屍が世に充満していると言われるのである……。

人間の持つ独自の〝すがたかたち〟すなわち人間の原形は、動物のそれ、さらには植物のそれと比較することによってのみ明らかにされるものと思われる。言いかえれば、これらの三者に共通した生過程の原形を求め、その原形の人間における変容を求めればよい。これがゲーテ形態学の根底をなす方法論である。

生過程とは「成長」と「生殖」の位相交替のはてしなく続く、ひとつの波形として描き出すことができる。この典型として、複相核[注1]の無性世代と単相核の有性世代の互いに交替する、かの隠花[注2]植物のみごとな生の波がしばしば引用されるのであるが、この「食と性」の営みが植物と動物の間でいちじるしく異なった形をとって行われることはあらためて言うまでもない。

[イ]、合成能力の備わった植物が植わったままで生を営むのに対し、この能力に〝欠〟けた動物は、〝動〟き廻って草木の実りを求めることになる。この文字どおり〝欲動〟的な生きものの動物に「運動と[ウ]」という双極の機能が、光合成能の代償として備わったことは、これまた自然のなりゆきと言わねばならないであろう。

植物はしたがって、完全に無感覚・無運動の、言ってみれば③カクセイのない熟睡の生涯を永遠に繰返してゆく生きものということになるのであるが、この真夏の太陽も見えない、春の嵐も肌に感ずることのない生物が、しからばいかにして歳月の移り変りを知ることになるのであろうか？それはこの植物を形成する一つ一つの細胞原形質に「遠い彼方」と共振する性能が備わっているから、と説明するよりないであろう。[エ]的に見ればこの原形質の母胎は地球であり、さらに地球の母胎は太陽でなければならない。

したがって、この原形質の生のリズムがたとえば太陽の黒点のそれに共振することがあるとしてもなんら不思議とするにはあたらないであろう。それは心臓から切り離された一個の心筋細胞が④バイヨウ液の中でかつての心拍のリズムをもののみごとに復活させるのと少しも変わらないのであるから。細胞原形質には、遠くを見る目玉のない代りに、そうした「遠受容」の性能

が備わっていたことになる。これを生物の持つ「観得」の性能[1]と呼ぶ。植物はこのおかげで、自らの生のリズムを宇宙のそれに参画させる。われわれはその成長繁栄と開花結実の二つの相の明らかな交替が日月星辰の波動と共鳴しあって一分の狂いもないのを見るであろう。こうして植物の生は大自然を彩る鮮やかな絵模様と化す。

さて、これが動物ではどのようになっているのか？その原形質もまた宇宙のリズムに乗って自らの食と性を営んでゆくのであるが、ここではさらに、そのときどきの原形質の欠乏を満たす糧を、それがたとい五感の及ばぬ遥か彼方のものであっても、それを的確に観得し、それに向かって運動を起こす。つまり成長繁栄・開花結実という生過程にのみ結ばれた植物の「観得」の性能は、動物ではさらに餌と異性に向かう個体運動にまで結ばれることとなる。かれらが日月星辰のリズムに乗ってある時は大空を渡り、ある時は急流を遡り、それぞれ彼方の見えぬ「食と性」の目標に向かってあたかも生磁気に引きよせられるがごとくに進んでゆく――いわゆる〝鳥の渡り〟とか〝魚の産卵〟に見られる動物の「本能」とは、まさにこの「遠観得」の性能に［オ］するものであることがここで判明した。

さて、動物の観得はこれだけではない。食と性の目標がやがて運動器とともに開発された感覚器の窓を通して直接に観得されることとなり、こうした感覚・運動を営むいわば「肉の体」の出現によって動物界ではひとつの意味を持った「外界」が種ごとに形成されることとなるのであるが、それは人間にいたって一挙に無限の「世界」にまで拡大される。かれらの五感を通して入ってくるもの、それは食と性に関係したものだけではない。そこでは、森羅万象のひとつひとつがそれぞれの〝すがたかたち〟を表わしてひとびとの「心情」を揺り動かすのであるが、じつはその時、五感に差し込むそれら諸形象の中に、われわれは、その植物原形質が観得した「遠」の〝おもかげ〟を現実に見出すことができるのである。

地球上の森羅万象はことごとく地球生誕の劫初[注3]の昔につらなる。それらは言いかえれば、ことごとく五十億の歴史を持つ。われわれの心の眼はそこに映る〝すがたかたち〟の中にそうした「遠」を見てとるのである。一ヵ月の胎児の顔貌は現存する古代魚のそれとともに、ひとびとの心を古生代の彼方にまで連れ去ることであろう。そしてこの地上のすべての生物を生み出し、はぐくみ育てたその時代の海水が、いまもなおその〝おもかげ〟を母胎羊水に宿し、われわれの揺籃の袋をくまなく満たすのを

見るのである。

植物で微睡(まどろ)んでいた肉体と心情は、まず前者が動物で眼覚め、ついで後者が人間で眼覚める。こうして諸形象の中に〝おもかげ〟言いかえればその(2)〝なりたち〟を観得する人間独自の性能がここに誕生することとなるのであるが、人間の生命とはまさにそうした基盤の上にきずかれてゆくのでなければならない。

さて、心情の③カクセイによって体得された森羅万象の〝すがたかたち〟は、やがて人類が精神の稲妻に打たれた時、そのいわば幻の像がひとつの鮮やかな映像として刻々の瞬間に固定されることとなる。ひとびとはその映像をさまざまな方法で表わしそこに豊かな造形の世界を繰り展げてゆくのであるが、しかしやがてかれらの関心はそのかたちの持つ法則性いわゆる〝しかけしくみ〟の方に向けられ、そこで自然科学の目ざましい世界を開拓してゆく。それは上述の精神の発達に歩調を合わせて進行する過程であるが、じつはその一方において、この精神がいつの間にか人間のなかに強大な自我を確立させ、これが無常の流れに逆らっておのれを不動のものに固定する。［　Ⅱ　］がここに生れ、そしてまさにここから、自然の〝しかけしくみ〟を逆用して、おのれの飽くなき欲望充足に役立たせようとする今日の世相が成立することとなる。それは、心情の支えを失って精神に憑(つ)かれた自我者の集団が、この地球の自然を文字通り「原形」をとどめぬまでに掘り返し、掘り尽して倦(う)むことがない昨今の光景に如実に象徴されるであろう。それはカルチャー(culture 耕作)の終幕を意味する。

さて、それでは人類本来の姿とはいったいどこにあるのか？われわれはこれを、精神が逆に心情に⑤ホウシした上古代の人間像に求めるであろう。そこでは自然のすがたかたち、いわゆる持ち味の生かされた利用厚生が行われ、ひとびとは天然自然の中でくらしを営んだ。「エデンの園」そして「桃源郷」と呼ばれる先史数万年のそれはひとときであったと思われる。われわれはここでその時代の面影を、まぎれもなく、われわれの幼児の忘我の一瞬に見てとることであろう。人間形成とは人間の原型完成の謂(いわ)れである。それはすでに述べた〝人間らしさ〟の完成にほかならない。人間の生命はこのとき初めて誕生する……。

（三木成夫『人間生命の誕生』より。ただし原文の一部を変更した。）

注1　複相　細胞核内の染色体の構成。一組の染色体をもつ状態を単相といい生殖細胞でみられ、二組のときは複相といい体細胞でみられる。

注2　隠花植物　シダ類、コケ類、菌類、藻類など、種子植物以外のすべての植物。

注3　劫初（ごう）　この世の初め。

問一　本文中の空欄［ア］～［オ］に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ア　a　ところが　b　したがって　c　さらに　d　むしろ　e　とはいえ

イ　a　そして　b　さらに　c　すなわち　d　ところで　e　けれど

ウ　a　成長　b　観得　c　生殖　d　静止　e　感覚

エ　a　包括　b　客観　c　巨視　d　批判　e　総合

オ　a　比肩　b　依存　c　共振　d　拮抗　e　結実

問二　本文中の空欄［I］に入る最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　人間の〝しかけしくみ〟に宿り、生活を支える原動力のようなものであること

b　生活の中にではなく、森羅万象の〝すがたかたち〟の中に宿るものであること

c　人間の〝こころの眼〟と〝あたまの眼〟の両方によって把握できるものであること

d　人間の〝すがたかたち〟として把握されて、力学的運動体をなすものであること

e　生活と表裏一体の関係であり、生活が終わることによって喪失するものであること

問三　傍線部(1)「生物の持つ「観得」の性能」はどのような意味を持つと筆者は考えているか。ふさわしくないものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　観得の性能によって、植物は、「遠い彼方」と共振することができる。

b　観得の性能によって、植物は、成長繁栄と開花結実の生過程に結ばれる。

c　観得の性能によって、動物は、食と異性に向かう個体運動に結ばれる。

d　観得の性能によって、植物は、歳月の移り変りを知らずに成長することができる。

e　観得の性能によって、動物は、意味を持った「外界」を形成することができる。

問四　傍線部(2)「〝なりたち〟を観得する人間独自の性能」に関する筆者の説明について、最もふさわしいものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　地球上の森羅万象の〝しかけしくみ〟の中に「遠」を見てとることができる。

b　様々な目標の中から、「食と性」の目標を優先させることができる。

c　自然の〝しかけしくみ〟を逆用して、自らの欲望充足に役立てることができる。

d　精神を発達させることができ、揺るがない自我を確立させることができる。

e　五感を通して、諸形象の中に「遠」の〝おもかげ〟を見出すことができる。

問五　本文中の空欄 Ⅱ に入るものとして最も適切なものを、つぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　科学は万能であるというひとつの確信
b　人間は限りなく発展できるというひとつの楽観
c　人間のみが自然を解明できるというひとつの誤解
d　人間は自然と共存できるというひとつの願望
e　世界が人間を中心に動くというひとつの錯覚

問六　本文の内容に合致するものをつぎのa～gの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　「生命」の有無と「生活」の有無が平行するように、「生命」を捉えるべきである。
b　ゲーテの人間形態学は、植物、動物、人間の三者の生過程が根本的に異なることを結論としている。
c　人間は、森羅万象の〝しかけしくみ〟に関心を向けることによって、自然科学を発展させた。
d　人間は〝あたまの眼〟によって、森羅万象を体得し、造形の世界を豊かにすることができた。
e　人間は、心情の支えを失い、自らの欲望のおもむくままに行動した結果、自然破壊に至った。
f　自然の〝しかけしくみ〟の利用厚生は、精神を発達させることによって、心情を豊かにする。
g　植物は、植わったままで生を営むため、動物と比して、観得の性能が優れている。

問七　傍線部①～⑤のカタカナにふさわしい漢字を、後の各群のa～hの中からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。ただし、本文中の同じ番号の傍線部のカタカナは、同じ漢字を意味することとする。

①ハイカン

a 配　b 廃　c 拝　d 排　e 管　f 観　g 刊　h 缶

②キョウレツ

a 共　b 協　c 教　d 強　e 裂　f 列　g 劣　h 烈

③カクセイ

a 隔　b 覚　c 拡　d 郭　e 声　f 清　g 醒　h 世

④バイヨウ

a 培　b 媒　c 賠　d 倍　e 様　f 養　g 要　h 用

⑤ホウシ

a 放　b 芳　c 奉　d 法　e 志　f 師　g 仕　h 資